



半七捕物帳 09

ゆきどけ

# 春の雪解

岡本綺堂



青空文庫

青空  
文庫

「あなたはお芝居が好きだから、河内山こうちやまの狂言を御存

知でしょう。三千歳みちとせの花魁おいらんが入谷の寮へ出養生をして

いると、そこへ直侍なおざむらいが忍んで来る。あの清元の外題げだいは

なんと云いましたたつけね。そう、忍逢春雪解しのびあはるのゆきどけ。わたく

しはあの狂言を看みるたんびに、いつも思い出すことが

あるんですよ」と、半七老人はつづけて話した。「勿論

お話の筋道はまるで違いますかね。舞台は同じ

いりやたんぼ  
入谷田圃で、

春の雪のちらちら降る夕方に、松助の丈

賀のような按摩あんまが頭巾をかぶつて出て来る、その場面

の趣があゝの狂言にそっくりなんですよ。まあ、聴いて

ください。わたくしの方は素話すばなしで、浜町の太夫さんの

粹な喉を聴かせるなんていうわけには行かないんです

から、お話つやに艶つやはありませんがね」

慶応元年の正月の末であつた。神田から下谷の竜泉

寺前まで用達ようたしに行つた半七は、七ツ半（午後五時）頃に

先方の家を出ると、帰り路はもう薄暗くなつていた。

春といつても此の頃の日はまだ短いのに、きょうは朝から空の色が鼠に染まつて、今にも白い物がこぼれ落ちそうな暗い寒い影に掩われているので、取り分けて夕暮が早く迫つて来たように思われた。先方でも傘を貸してやろうと云つてくれたが、家へ帰るまで位はどうか持ちこたえるだろうと断わつて、半七はふところ手でそこを出ると、入谷田圃へさしかかる頃には、鶴の羽をむしつたような白い影がもう眼先へちらついて来たので、半七は手拭を出して頬かむりをして、田圃を吹きぬける寒い風のなかを突っ切つて歩いた。

「ちよいと、徳寿さん。おまえさんしゅうじょうも強情だね。まあ、ちよいと来ておくれと云うに……」

女の声が耳にはいつたので、半七はふと見かえると、どこかの寮らしい風雅な構えの門の前で、年頃は二十五六の仲働きらしい小粋な女が、一人の按摩の袂をつかんで曳き戻そうとしているのであった。

「お時さん。いけませんよ。きようはこれから廊なかにお約束があるんですから、まあ堪忍しておくんなさいよ」と、按摩は逃げるように振り切つて行こうとするのを、お時という女はまた曳き戻した。

「それじゃああたしが困るんだからさ。按摩さんはほかに大勢あるけれども、花魁はお前さんが御鼻肩ごひいきで、ほかの人じゃあいけないと云うんだから、素直に来てくれないと、あたしが全く困るんだよ」

「御鼻肩にして下さるのはまことにありがたいことで、いつもお礼を申しているのでございますが、きょうは何分にも前々からのお約束がありますので……」

「嘘をおつきよ、お前さんは此の頃毎日そんなことを云っているんだもの。花魁だってあたしだって本当に思うかね。ぐずぐず云ってないで早く来ておくれよ。」

焦れつたい人だねえ」

「でも、いけませんよ。まったくきょうばかりは堪忍して下さい」

どつちもなかなか強情で、容易に埒が明きそうにもなかつた。しかし格別に面白そうな事件でもないの、半七は好い加減に聞き流して通り過ぎた。雪は景色ばかりで、家へ帰りつく頃には歇やんでしまつたが、それから陰つた日が二日ほどつづいた。三日目に半七はふたたび竜泉寺前へ行かなければならない用事が出来た。「きょうこそはあぶねえ」



かれは雨傘を用意してゆくと、大きい雪が果たして落ちて来た。帰りはやはり七ツ過ぎになつて、入谷の田圃はもう真つ白に埋められていた。重い傘をかたげて、このあいだの寮の前まで来ると、日和ひより下駄の前鼻緒があいにく切れた。半七は舌打ちをしながら堀ぎわに身を寄せて、間にあわせにつくろつていると、雪を踏む下駄の音がきこえて、門の中からこの間の女が飛石伝いに出て来た。

「まあ、いつの間にか積つたこと」

独り言を云いながら、彼女は人待ち顔にたたずんで

いたが、傘を持つていない彼女は髪を打つ雪に堪えな  
いと見えて、やがて内へ引つ返してしまった。

手が亀縮かじかんでいるので、鼻緒を立てるのに暇がか  
かって、半七はようように下駄を突っかけて、泥だら  
けの手を雪で揉んでいるところへ、このあいだの按摩が  
馴れた足取りですたすた歩いて来た。その下駄の音を  
聞き付けたとみえて、女は待ち兼ねたように内からぬ  
け出して来た。前に懲こりたのであろう。今度は傘をす  
ぼめて差していた。

「徳寿さん。きょうは逃がさないよ」

呼びかけられて、按摩はおびえたように立ち停まつたが、きょうも何か頻しきりに云い訳して摺り抜けて行こうとするのを女はまた曳き戻した。こうした捫もんちやく着がたびたび続くので、半七も少しおかしく思つて、もうつくろつてしまった泥下駄を再びいじくるような風をして横眼でそつと窺つてみると、按摩はあくまでも強情に振り切つて、きょうも逃げるように此処を立ち去つてしまった。

「ほんとうにしようのない人だねえ」

口小言を云いながら女は内へ引つ込んだ。そのうし

ろ姿の消えるのを見送つて、半七はもう五、六間ゆき過ぎてゐる按摩の傘の白い影を追つた。彼はうしろから声をかけた。

「おい、按摩さん。徳寿さん」

「はい、はい」

聞き慣れない声に按摩は少し首をかしげて立ち停まると、半七は傘をならべて立つた。

「徳寿さん。寒いね。べらぼうに降るじゃあねえか。

おまえにやあ廓なかで二、三度厄介になつたことがあつたつけ。それ、このあいだも近江屋の二階だよ」

「はあ、左様でございましたか。年を取りますと、だんだんに勘がわるくなりましたして、御鼻肩様に毎々失礼をいたして相済みません。旦那もこれから廓へお出かけでございますか。こういう晩にお通いもまたお楽しみなものでございます。わが物と思えば軽し傘の雪とか申しましてね。はははははは」

こつちの出鱈目でたらめを知っているのか、知らないのか、徳寿は如才なく調子をあわせた。

「なにしろ悪く寒いね」

「この二、三日は冴え返りました」

「これから田圃を突つ切るのは楽じゃあねえ。どうだい、あすこで蕎麦の一杯も啜り込んで威勢をつけて行こうじゃねえか。おまえも付き合わねえか。廓へはいるのはまだちつと早かろう」

「はい、はい、どうも御馳走さまでございます。わたくしは下戸でございますけれど、御酒を召しあがるお方は一杯あがらなければ、この田圃はちつと骨が折れません。はい、はい、ありがとうございます」

一町ばかりを引つ返して、半七は小さな蕎麦屋の暖簾をくぐると、徳寿は頭巾の雪をはたきながら、古

びた角火鉢へ寒そうに咬<sup>かじ</sup>り付いた。半七は種物<sup>たねもの</sup>と酒を一本あつらえた。

「これはあられでございますね。江戸前の種物はこれに限ります。海苔の匂いも悪くございませんね」と、徳寿は顔じゆうを口にして、蕎麦のあたたかい匂いを嬉しそうに嗅<sup>か</sup>いでいた。

蕎麦屋の女房は門<sup>かど</sup>の行燈に灯を入れると、その薄暗い灯かげに照らされて、花びらのような大きい雪が重そうにぼたぼた落ちているのが暖簾<sup>のれん</sup>越しに見えた。一本の酒をやがて半分ほど飲んだ頃に、半七は話し出し

た。

「徳寿さん。おまえが今あすこで立ち話をしていたのは何処の寮だえ」

「旦那はあの辺においでなさいましたか。ちつとも存じません。はははは。いえ、あすこは廓の辰伊勢という家の寮でございますよ」

「先方じゃあ頻りに呼び込もうとするのを、おまえは無暗に逃げていたじゃあねえか。廓の寮ならば好いお得意様だ」

「ところが、旦那。どうもあすこは工合ぐあいが悪いんでし



てね。いえ、別に代をくれないの何のという訳じやないんですが、なんですかこう、気味の悪いような家でしてね」

半七は飲みかけた猪口ちよこをおいた。

「気味の悪い家……。そりやあどういふんだね。まさかに化けものが出る訳でもあるめえ」

「へえ、別にそんな噂もないんですが、わたくしはどうも気味が悪うございました……。あすここで呼ばれると何だがぞつとして、逃げるように断わつて来るんですよ」と、徳寿は鼻の頭の汗を手の甲で拭きながら云つ

た。

「変な話だね」と、半七は笑った。「どういいうわけで気味が悪いんだらう。判らねえな」

「わたくしにも判りません。ただ何となしに襟もとから水を浴びせられたように、からだ中がぞつとするんです。眼が見えませんからなんにも判りませんけれど、なにかこう、おかしなものが傍にでも坐っているような工合で……。まったく変でございますよ」

「一体あの寮には誰が来ているんだね」

「たがそで誰袖さんという花魁でございます。二十一二の勤め

盛りで、凄いやうな美しい女だそうでございますが、去年の霜月頃から用事をつけて、あの寮へ出養生に来て  
いるんでございますよ」

「暮から春へかけて店を引いているようじゃあ、よつ  
ほど悪いんだらうね」

それ程でもないらしいと徳寿は云つた。勿論、盲人  
の彼には詳しい様子もわからないが、いわゆるぶらぶ  
ら病いで寝たり起きたりしているらしいとの事であつ  
た。それにしても、その辰伊勢の寮がなぜそれほどに  
気味が悪いというのか、その仔細が半七には判らな

かった。徳寿がもうたくさんだと辞退するのを、無理に蕎麦の代りを取らせて、かれは酒を飲みながらおもむろにその仔細を訊き出そうとした。

「それが何と云つて、お話のしようもないんですよ」と、徳寿は顔をしかめてささやいた。

「まあ、旦那。聞いてください。わたくしが奥へ通されて、花魁の肩を揉んでいますと……大抵いつも夜か夕方ですが……花魁のそばに何か来て坐っているような工合で……。いいえ、それが新造しんぞ衆や女中達じゃありません。そんな人達ならば何とか口を利くでしょう

が、初めから終しまいまで一度も口を利いたこともないの  
で、座敷のうちには気味の悪いほどにしんとしているん  
です。まあ、早く云えば、幽霊でも出て来て、黙って  
いるんじゃないかと思われるようで……。わたくしは  
身体がぞつとして、どうにもこうにも我慢が出来ない  
んでございます。それですから、仲働きのお時さんに  
は気の毒ですけれども、この頃は無理に振り放して逃  
げてくるので……。いえ、もう、一軒のお得意ぐらい  
はしくじつても仕方がございません」

なんだか理窟があるような、理窟がないような、一

種奇怪な物語をこの盲人から聞かされて、半七も黙つてかんがえていた。日が暮れても雪はまだ降りやまないらしく、白い花びらが暖簾をくぐつて薄暗い土間へときどき舞い込んで来た。

もとより盲めくらの云うことで、別に取り留めた証拠もないのであるが、半七はそれを一種の不思議な話として、ただ聞き流してしまふわけには行かなかつた。彼はあくまでその不思議の正体を突き止めたかつた。その晩は徳寿に別れて、神田の家へまっすぐ帰つたが、あく朝、浅草の馬道うまみちにいる子分の庄太を呼びにやつた。「おい、庄太。廓は田町の重兵衛の縄張りだが、おれが

少しちよつかいを出して見たいことがあるんだ。てめえ一つ働いてくれ。江戸町ちやうに辰伊勢という女郎屋があるだろう。あすこの誰袖たがそでという女のことを少し洗つて貰いてえんだ」

「誰袖は入谷の寮に出ていると云うじゃありませんかと、庄太は心得顔に云つた。

「それを調べてくれと云うんだ。実は少しおれの腑おとこに落ちねえことがあるから……。つまりあの女には情夫でもあるか、なにか人から恨みでも受けているようなことでもあるか。それから如才じよさいもあるめえが、その辰



伊勢という店の内幕も一と通りは調べあげてくれ」

「わかりました。二、三日中にはみんな調べあげてまいります」

庄太は受け合つて帰つた。二、三日という約束が四、五日を過ぎても、庄太は顔を見せなかつた。あいつ何をしているのだらうと思つたが、一日を争う仕事でもないので、半七もそのまま打つちやつて置くと、二月の初めになつて庄太がぶらりと訪ねて来た。

「親分。申し訳がありません。実は小せえ餓鬼が麻疹はしかをやつたもんですから」

「そりやあいけねえな。軽く済みそうか」

「へえ、あんばい好い塩梅に軽そうです」と、庄太は云つた。「そ

こで親分、例の辰伊勢の一件ですが、まあ一と通りは洗つて来ましたよ」

庄太の報告によると、辰伊勢は江戸町でも可なり売つたが、安政の大地震のときに、抱えの遊女を穴倉へ閉じ籠めて置いて、みんな焼き殺してしまつたとかいうので、それから兎角にけちがついて、商売の方もあまり思わしくない。尤も吉原では暖簾のふる旧い店でもあり、ほかにも地所や家作かさくなどをもっているので、ま

ず相当に店を張っている。当時はおまき、というのが女主人で、永太郎という今年二十歳はたちの伴の後見をしているが、死んだ亭主と違つて、おまきは情けぶかい方で世間の評判も悪くない。誰袖はお職から二枚目の売れつ妓こで、去年の二の酉とりが済んだ頃から入谷の寮に出養生をしているが、女に似合わない大酒であるから、酒毒で胸を傷めたのだらうという噂である。年は二十一で、下谷の金杉の生まれだと女衞ぜげんが話した。

「いや、御苦労。まずそれで一と通りは判つた」と、半七はうなずいた。「そこで、その女には情夫おとことか何とか

いう者はねえのか。それだけの売れっ妓なら何かある  
だろう」

「それがはつきりと見当が付かねえそうで……。もち  
ろん馴染みの客は大勢あるんですが、なかなか手取り  
者らしいんで、どれがほんとうの情夫なんだか、店の  
者にもよく判っていないということです。これには私  
も困りましたよ」

それだけのことでは、半七も考えの付けようがな  
かった。

「きょうはかかあ嬢が留守だから、見舞はいずれ後から届け

るが、小児こどもが病氣じゃあ困るだろう。まあ、取りあえずこれだけ持つて行け」

半七は庄太に幾らかの金をやつて、まあ午飯ひるめしでも食つていけと云うと、庄太は喜んで鰻飯の馳走になつた。その間に彼は又こんなことを話した。

「こりやあ別の話ですがね。やつぱり金杉の方から吉原へ辻占つじうらを毎晩売りに来る娘があるんです。十六七で、容貌きりようがいいのに声がいいというので、廓でもだいぶ評判になつて、素見ひやかしなんぞは大騒ぎをしていたんだが、それがどうしてか、去年の暮頃からちつとも姿を見せ

なくなつてしまつたので、おせつかいの奴らがいろいろ詮議したがどうもわからない。たぶん情夫おとこでも出来て、駈落ちでもしたんだろうということになつてしまつたんですが、田町たまちの重兵衛はそれに何か目星をつけた事でもあるのか、子分に云い付けてその娘のゆくえを捜させているそうです」

「そうか」と、半七は考えた。「そんなことがあるのか。おらあちつとも知らなかつた。土地のことだけに重兵衛は眼が早えな。その辻占売りの娘というのは容貌が いいんだな。年は十六七……。むむ、間違げえのあり

「そんな年頃だ。名はなんというんだ」

「おきんというんだそうです。親分も何かお考えがありますか」

「まだ確かなことは云えねえが、少し胸に浮かんだことがある。まあ無駄足だと思つて、その金杉へ行つてみようよ。おまえも御苦労だが、一緒に来てくれ」

「ようがす」

飯を食つてしまつて、二人はすぐに金杉へ行つた。

きょうはのどかな日で、上野の森の上には薄紅い霞が流れていた。

「誰袖の家は金杉だな」と、半七は途中で云った。

「どつちを先にしようか。まあ、やつぱりその辻占売りの方から取りかかろう。おまえ、そのおきんという娘の家を知っているのか」

庄太は知らないと言った。どうで根こんよく探すのは覚悟の上であるから、二人はあたたかい日を背負いながら金杉の方へぶらぶら歩いて行つた。そのうちに何を見付けたのか、半七は急に立ち停まつた。

「おい、徳寿さん、どうしたい」

按摩の徳寿は杖にすがつてちよつと考えたが、勘の



いい彼はこのあいだの蕎麦屋の旦那の声を忘れなかつた。彼は頻りにその時の礼を云っていた。

「よいお天気になりました結構でございます。旦那様、今日はどちらへ……」

「丁度いい所でおまえに逢った。お前もこの近所だそ  
うだが、ここらにおきんという辻占売りの家はねえか  
しら」

「へえ。おきんはわたくしの近所におりましたが、昨  
年の暮から何処へか行ってしまいましたよ」

「本人はいなくつても、親か兄妹きょうだいがあるだろう。ひと

り者じゃあるめえ」

「それが旦那。こういう訳なんでございますよ」と、徳寿は仔細らしく話した。

「おきんは兄貴と二人で暮していたんですが、その兄貴の寅松というのは博奕ぼくち打ちの道楽者でしてね。おきんのゆくえが知れなくなると、それから半月ばかり経って、これも何処へか夜逃げのように姿を隠してしまいました。なんでも博奕場で喧嘩をして、人に傷をつけたとかいうので、それが面倒になって何処へか飛んで行ってしまったらしいんです。そういうわけです

から、家はもう空店になつてしまつて、二、三日中にほかの人が越して来るとかいう噂でございます」

田町の重兵衛が眼をつけているのは、おきんの問題より恐らくこの寅松に関係している事件であろうと半七は想像した。かれは更に徳寿に訊いた。

「あの辰伊勢の寮にいる誰袖という女も、やつぱり金杉の近所の者だというじゃあねえか。お前、知らねえか」

「存じて居ります。誰袖さんの花魁も金杉の生まれで、やつぱりおきんの近所で育つたんだそうですが、ふたおや両親

ともにもう死に絶えてしましまして、これも跡方はございませんよ」

すべての手掛りが断えてしまったので、半七は失望させられた。それでも彼は強情にこの按摩から何かの手蔓てづるを探り出そうと試みた。今もむかしも根気が乏しくては出来ない仕事である。

「ねえ、徳寿さん、このあいだ聞いていりゃあ、その誰袖の花魁は大変おまえを鼻屑にして、ほかの按摩さんじゃいけねえと云っているというじゃあねえか。おかしなことを訊くようだが、どうしてお前、そんなに花

魁の気に入ったんだえ。揉み方の上手ばかりじゃあるめえ。何かほかに訳があるだろう」

「へえ」と、徳寿はにやにや笑っていた。

半七と庄太は顔を見あわせた。なんと思つたか、半七は紙入れから一步の銀かねを出して徳寿の手に握らせた。そうして、ちよいと其処まで来てくれと云つて、彼を左側の横町へ連れ込んだ。柳原家の抱え屋敷と安楽寺という寺の間をぬけると、正面には一面の田畑が広く開けていた。田の畔くろを流れる小さい水のはたで、子供が泥鰌どじょうをすくつているほかに、人通りもないのを見す

まして、半七はまた訊いた。

「おまえ、隠しちやあいけねえ。こんな野暮なことを云いたくねえが、おれは実はふところに十手を持つているんだ」

徳寿は俄かに顔の色を変えて、おし潰されたように、小腰をかがめた。わたくしの知っているだけの事はなんでも申し上げますと、かれはふるえながら答えた。

「じゃあ、正直に云つてくれ。おまえ、誰袖に頼まれて、なにか内証の文使ふみいでもするんじゃないやあねえか」

「恐れ入りました」と、徳寿は見えない眼をとじて頭を

下げた。「お察しの通りでございます」

「その文使いをする相手は誰だ」

「それは辰伊勢の若旦那でございます」

半七と庄太は顔をみあわせた。

## 三

徳寿の話はこうであつた。

誰袖はおととしの秋頃から主人の倅の永太郎と忍び逢つている。突き通しは廊くろわの禁物きんもつで、それが知れると

面倒であるから、誰袖は病氣にかこつけて入谷の寮へたびたび出養生にゆく。そこへ永太郎が忍んでゆく。

普通の店と違って、女主人が情けぶかいのと、誰袖が売れっ妓であるのとで、辰伊勢の店でも余りやかまし



くは云わないで、誰袖を寮の方へ出してやる。万事の首尾は仲働きのお時が呑み込んでいて、ほかの者にはちつとも知らさなかつた。

若主人の永太郎はまだ部屋住みも同様の身の上で、勝手に店をあけて度々出あるくわけにもゆかないので、誰袖が寮に出ているあいだも毎日かならず逢いに来ることは出来なかつた。女はそれをもどかしく思つて、男が二日も顔をみせないとすぐに呼び出しの手紙をやる。その文使いの役は徳寿であるので、彼が誰袖に可愛がられるのも無理はなかつた。

「それほど可愛がつてくれるところへ、お前はなぜ忌がつて寄り付かねえんだ」と、半七はまた訊いた。「あとの係り合いが面倒だと思ふのか」

「それもあります……。それはおかみさんがいい人ですから、そうむずかしいこともあるまいと思ひますが……。このあいだも申し上げました通り、あすこの寮へ行つて、花魁のそばに坐つていますと、何だかぞつとしてどうしても我慢が出来ないのでございます。どういふ訳ですか、自分にも一向わかりません」と、徳寿も思案に余るような顔をして見せた。

「あすこの店で此の頃に死んだ女でもあるかえ」

「そんな話は聞きません。大地震の時には大勢死んだ  
そうですが、その後は一人も無いようです。なにしろ、  
先の旦那と違つて、おかみさんも若旦那も善い人です  
から、抱えの妓どもをいじめたという噂も無し、心中  
した妓もないようです」

「よし、判つた。きょうのことは誰にも云つちやあな  
らねえぜ」

口止めをして半七は徳寿に別れた。

「どうしても、今度はその寅松という野郎を探し出さ

なけりやあならねえ」

きようだい

半七は寅松兄妹が住んでいたという裏長屋をたずねて、その家主に逢った。家主も兄妹のゆくえを知らなかつた。しかし去年の押し詰まりに、寅松がどこからかそつと舞い戻つて来て、近所の寺へ幾らかの金を納めて行つたという噂があると話した。二人はすぐに其の寺をたずねてゆくと、寺でも最初はいまいなことを云っていたが、結局去年の暮の十五日に寅松が不意に顔を出して、五両の金を納めて行つたと打ち明けた。

「寅松の両親はこの寺に埋まっていますが、なにしろあの通りの道楽者ですから、近所にいなながら盆暮の附け届けも碌々したことはないんです。それが何と  
思つたか、不意にたずねて来て、なにぶん御回向ごえこうを頼むと云つて五両という金をめずらしく置いて行きました」と、住職も不思議そうに話した。「そうして、こんなことを云っていました。妹も先頃からゆくえ知れずになつてしまつて、何処にどうしているか判らないから、家出の日を命日だと思つて、どうか御回向を願いたい……。わたくしが承知してやったら、寅松もたい

そう喜んで、礼を云つて帰りました」

寺を出ると、庄太はささやいた。

「なるほど、寅松という野郎は変ですね」

「むむ。どうしても野郎を引き挙げなけりやあいけねえ。博奕を打つというから友達もあるだろう。おめえ、なんとか工夫してそいつの居どこを突き留めてくれ」  
「ええ、なんとかありませんよう」

「頼んだぜ」

二人は約束して別れた。そのあくる日、半七の女房が馬道の庄太の家へ見舞にゆくと、子供の麻疹が思い

のほかにか重くなつて、庄太夫婦も手放すことが出来な  
いらしかつた。その話を聴いて、寅松の一件も当分は  
埒があくまいと半七は思つていると、果たして庄太は  
その後ちつとも姿をみせなかつた。二月にはいつてか  
ら暖い日和ひよりがつついたので、もう春が来たものと欺さ  
れていると、それから四、五日たつて夕方から急に寒  
くなつて来た。夜中から降り出したと見えて、朝起き  
てみると真つ白になつていた。

「春の雪だ。大したことはあるめえ」

こう云つていゝうちに雪はやんで、四ツ（午前十時）

頃には、屋根から融とけて落ちる音が忙がしそうにきこえた。この二、三日はさしかかった用もないので、半七は午飯をすませるとすぐに家を出た。庄太のたよりを何時までもぼんやり待っていていられないと思ったので、彼は雪解け路をたどって金杉へ出かけた。徳寿の家をたずねて、彼をそつと呼び出すと、徳寿はすぐに出て来た。

「路のわるいのに気の毒だが、このあいだのところまで来てくれねえか。おれが手を引いてやるから」  
「なに、大丈夫でございます」



屋敷と寺の間をぬけて、二人は雪の残っている田圃<sup>たんぼ</sup>路に立った。

「早速だが、その後に辰伊勢の寮へ行つたかえ」と、半七は訊いた。

「どうしまして」と、徳寿は頭<sup>かぶり</sup>を振つた。「それにお時さんの方でも根負けがしたと見えて、もう無理に呼び込もうともしませんから、わたくしの方でも仕合わせでございます。それに辰伊勢の店の方で聞きますと、お時さんももう暇を出されるんだとかいうことです。ところが、お時さんの方じゃあ容易に動かないという

ので、なんだか内輪ではごたごたしているようでございますよ」

「お時という女の家はどこだえ」

「本所だとかいうことですが、わたくしもよく存じません」

「そうか。路の悪いのにわざわざ呼び出して済まなかつた。これも御用だ。堪忍してくんねえ」

徳寿を帰してやって、半七はしばらく考えた。いろいろの材料がそれからそれへとあつまつて来ながら、彼はそれを取りまとめ一つの断案を下す<sup>くだ</sup>ことが出来

なかつた。一体自分は何を調べているのか、それも確かな見当は付いていなかつた。取り留めのない按摩の話を手がかりにして辰伊勢の寮を探ろうとしているうちに、辻占売りの娘の駈落ち事件に突きあたつた。この二つが結び付いているものか、或いはまつたく無関係の出来事か、それもまだ想像が付かなかつた。折角調べあげたところで、それが果たしてどれほどの効果を生み出すか、それも一切判らなかつた。併し一種の好奇心ばかりでなく、半七はどうも此の事件をそのままに投<sup>ほう</sup>り出してしまいたくなかつた。なんだか此の事

件には深い奥行きがありそうに思われてならなかった。「骨折り損だと思つて、もう少しほじつて見ろ」

彼は上野の山下まで用達に行つて、すぐに家に帰ろうとしたが、また思い返して入谷田圃へ足を向けた。雪あがりの底冷えのする日で、田圃へ出る頃にはすっかり暮れてしまった。お荷物になる傘をさげて、雪解け路を一と足ぬきに歩きながら、辰伊勢の寮のそばまで来ると、門のなかから一人の女が出て来た。顔は確かにみえないが、その格好がどうもかのお時らしいので、半七はすぐにその後を尾<sup>つ</sup>けてゆくと、女はこの間

の蕎麦屋へはいった。

こつちの顔を識っている筈はないと多寡をくくつて、半七も少しあとからその暖簾をくぐると、狭い店にはお時のほかにもう一人の男が来ていた。唐棧とうざんの半纏を着て平ぐけを締めたその男の風俗が、堅気の人間でないことは半七にもすぐに覺られた。男は二十五六で、色のあさ黒い立派な江戸っ子であつた。彼はここでお時を待ち合わせていたらしく、女と向い合つて酒を飲んでいた。半七は隅の方に坐つて、好い加減な誂え物をした。

男も女も時々こつちを後目しりめに視ていたが、格別に気を置いてもいないらしく、火鉢に伸よく手をかざしながら、小声でしきりに話していた。

「もうこうなつちやあ、仕方がないやね」と、女は云つた。

「おれが出なけりやあ幕が閉まらねえかな」と、男は云つた。

「ぐずぐずして……。心中でもされた日にやあ玉無しだあね」と、女は小声でおどすように云つた。

それから先きは聴き取れなかったが、心中という一

句を聞いて、半七は胸をおどらせた。おそらく誰袖という女が心中するのであらうと思われた。

事件はいよいよこぐらかつて来たらしいので、半七も息をのみ込んで耳を澄ましていたが、話はよほどこみいった相談らしく、女の声はいよいよひそめいて、眼と鼻のあいだにいる半七の耳にも其の秘密を洩らさなかつた。じれつたいのを我慢して、ただその成り行きを窺っていると、二人はやがて相談を決めたらしく、勘定を払ってここを出た。

二人をやり過ぎして、半七も起つた。かれは蕎麦の

代を払いながら女に訊いた。

「おかみさん。今出て行つた女は辰伊勢の寮のお時さんというんだらう」

「左様でございます」

「連れの男は誰だえ」

「あれは寅さんという人でございます」

「寅さん」と、半七の眼は光つた。「寅松というんじゃないか。辻占売りのおきん坊の兄貴の……え、そうかえ」

「よく御存じでございますね」



半七は急に面白くなつて来た。かれは好い加減に挨拶して表へ出ると、一本路をならんでゆく二人のうしろ影が、消え残っている雪明かりに薄黒く見えた。半七は足もとに気をつけながら、大根卸しのように泥濘ぬかっている雪解け路を辿つてゆくと、二人の影は辰伊勢の寮の前で止まった。ここでも又何かささやいているようであつたが、二つの影はやがて離れて、女は門のなかへ消えた。

## 四

男はどうするかと見ていると、彼はまた引つ返して元来た方角へ歩き出そうとして、自分のあとを尾けて来た半七とちようど向い合つた。一本路をすれ違つて行こうとする彼を、半七は追うように呼び止めた。

「おい、あにあにいい、寅大哥」

寅松は黙つて立ち停まつた。

「おめえ、久しく顔を見せねえじゃあねえか。どこに

引つ込んでいたんだ」と、半七は続けて馴れ馴れしく声をかけた。

「おめえは誰だ」と、寅松は薄暗いなかで用心深そうに透かして視た。

「まあ、誰でもいいや。孔雀長屋の二階で二、三度逢つたことがあるんだ」

「嘘をつけ」と、寅松は身構えをしながら云つた。「てめえは今、そこの蕎麦屋にいた野郎だろう。どうも面付きが気に食わねえと思つた。田町の重兵衛の子分にてめえのような面を見たことはねえ。てめえ達の食い

物になる俺じゃあねえ。おれを連れて行きたくけりやあ  
重兵衛を呼んで来い」

「大哥、ひどく威勢が好いな」と、半七はあざわらった。  
「まあ、なんでもいいから其処までおとなしく来てく  
れ」

「馬鹿をいえ。今度伝馬町てんまちようへ行けば仕舞い湯だ。てめ

え達のような下つ引にあげられて堪まるものか。もち  
竿で孔雀を差そうとすると、ちつとばかり的あてがちがう  
ぞ。おれを縛りたくけりやあ立派に十手と捕り縄を持つ  
て来い」

むやみに気が強いので、半七も持て余した。もうこ  
うなれば忌でも泥仕合いをするよりほかはない。この  
雪あがりには厄介だとは思つたが、多寡が遊び人ひとり  
を手捕りするのにはさのみむずかしくもない。もう腕ず  
くで引き摺って行こうと思つた。

「やい、寅。てめえのような半端人足はんぱを相手にして、

泥沫はねをあげるのもいやだと思つて、お慈悲をかけてや  
りや實際限がねえ。おれは立派に御用の十手を持つて  
いるが、てめえを縛つてから後で見せてやる。さあ、  
素直に來い」

一と足すすみ寄ると、寅松は一と足さがつてふところ  
ろに手を入れた。岡つ引を相手に刃物などを振り廻す  
のは素人である。こいつは口ほどでもない奴だと半七  
はすぐに多寡をくくつてしまった。

併しその素人がかえつて剣呑であるから、彼は相手  
の胆きもをおびやかすために一つ呶鳴った。

「寅松。御用だ。神妙にしろ」

この途端に、誰か半七のうしろから忍んで来て、両  
手でその眼隠しをする者があつた。不意を喰らつて彼  
もすこし慌てたが、その手触りでそれが女の手である

ことを半七はすぐに覺つた。女は云うまでもなく、かのお時であろう。彼は肩を沈めて相手の腕を引つ掴むと同時に自分の爪先へ投げ出すと、その上を飛び越えて寅松が突いて来た。かれの手にはあいくち匕首が光っていた。「御用だ」と、半七はまた叱つた。

寅松の刃は空を二、三度突いて、彼のからだだが右へ左へただようとみるうちに、右の手につかんでいる刃物はもう叩き落されてしまった。左の手首には繩がかつていた。相手がなみなみの者でないと覺つて、かれは急に弱い音を吹き出した。

「親分。どうもお見それ申しました。お手数をかけてまことに申し訳がございません。まあ、勘弁して下さいまし」

「今だから行つて聞かせる。おれは神田の半七だ」と、半七は名乗った。「往来なかじやあどうにもならねえ。おい、お時。てめえもかかり合いだ。主人の家へ案内しろ」

泥まぶれになつて這い起きたお時と、縄付きの寅松とを引つ立てて、半七は辰伊勢の寮へはいると、奥から小女が泣き声をあげて駆け出して来た。



「若旦那と花魁が……」

辰伊勢の息子と誰袖とは、奥の八畳の座敷に逆さ屏風を立てまわして、二人ともに剃刀かみそりで喉を突いていたのであった。

「その時にはわたくしも面喰らいましたよ」と、半七老人は云った。「なるほど、お時の口から心中というようなことを聞いていましたが、さすがに今すぐとは思いませんでしたからね。なにしろ、一方には縄付きが二人出る。一方には二人の死骸の検視を受ける。辰伊勢

の寮は大騒ぎで。それからそれへと噂が立つたと見えて、夜の更けるまで門の前はいっぱいの人でしたよ」

「辰伊勢の息子と誰袖はどうして心中したんです。それが又なにかお時と寅松とに関係があるんですか」

私にはまだその訳がちつとも判らなかつた。半七老人は更に詳しく説明してくれた。

「その誰袖という女は人殺しをしているんです。辻占売りのおきんという娘を殺したのは誰袖の仕業しわざなんです。なぜそんなことをしたかと云うと、前にもお話し申した通り、誰袖は主人の伴の永太郎と深い仲になつ

て、証文を踏み倒すの何のという魂胆でなく、男にほんとうに惚れ抜いていたんです。すると、どうしたはずみか、その永太郎が辻占売りの評判娘と関係が出来てしまったので、誰袖はそれを聞いてひどく口惜しがって……。ああいう商売の女のやきもちは人一倍で、そりやあ実におそろしいもんですからね。ふだんから仲好しの仲働きに云い付けて、おきんが廓から夜遅く帰って来るところを、無理に寮のなかへ呼び込んで、さんざん怨みを云った上で、まあひどいことをするじゃありませんか。打つたり抓つたりした揚句に、自

分の細紐でおきんをととうとう絞め殺してしまつたんです。まさかにそんなことにはなるまいと思つていたので、仲働きのお時も一時はびつくりしたんですが、こいつがなかなかしつかり者で、しかもおきんの兄貴の寅松という遊び人と、とうから情交わけがあつたんです」

「不思議な因縁ですね」

「そういうわけで、おきんも前からお時を識つていたので、ついうかうかと辰伊勢の寮へ引つ張り込まれて飛んだ災難に逢うことになつたのでしよう。そこで、お時はすぐに兄貴の寅松を呼んで来て、なにもかも打

ち明けて後の始末を相談すると、寅松もびつくりしたんですが、こいつも根が悪い奴ですから、自分の情婦おんなの頼みといい、内分にすれば纏まった金がふところにはいると聞いて、妹のかたきを取ろうという料簡も無しに素直に承知してしまつたんです。そして寮の床下を深く掘つて、おきんの死骸をそつと埋めて、みんなが素知らん顔をしていたんです。何でもその口止めに差当り百両の金をお時の手から寅松に渡したというこ  
とです」

「その金はどこから出たんですか」と、わたしは根掘り

葉掘り詮議した。

「その金はつまり永太郎の手から出たんです」と、半七老人は云った。「誰袖はその明くる日すぐに永太郎を呼び付けて、これも正直に打ち明けて、わたしは口惜しいからあのおきんをいじめ殺した。さあ、それが悪ければどうともしてくれと膝詰めで談判したんです。

永太郎は蒼くなつてふるえたそうですけれども、もともと自分にも落度おちどはあり、そんなことが表沙汰になつた日には辰伊勢の暖簾のれんにもかかわることですから、とうとう誰袖の云うなり次第に内済金の百両を出すこと

になつたんですが、悪銭身に付かずの警たえで、寅松はその百両を賭場ですつかり取られてしまつて、おまけに盆の上の喧嘩から相手に傷をつけて、土地にもいられないようなことになつてしまいました。それでもさすがに気が咎めるのか、それとも兄妹の人情というのでしようか、まだふところに金のある間に自分の菩提寺へ久し振りでたずねて行つて、妹の回向料の積りで何となしに五両の金を納めて行つたんです。それから草加そうかの在の方へ行つて、ひと月ばかり隠れていたんですが、江戸者が麦飯を食つちやあいられませんかから、

又こつそりと江戸へ帰つて来て、お時から幾らかずつの小遣いを強請いたぶつて、そこらをうろ付いているうちに、田町の重兵衛に眼をつけられて、お時と情交わけのあることも知れてしまったんです。重兵衛は自分の縄張り内ですから辰伊勢に引き合いを付けるのも気の毒だと思つて、早くお暇を出してしまえと内々で教えてやつたんですが、それが却つて仇となつて……」

「お時は素直に出て行かなかつたんですか」

「そりゃあ素直に動きませんや。永太郎と誰袖の急所を掴んでいるんですもの、ここで少なくとも二百と三百



と纏まつた金を貰わなければ、おとなしく出て行くわけにはゆかないと云つて、しきりに二人をおどかしていたんですが、永太郎も部屋住みの身の上で、とてもそんな金が出来る筈はなし、誰袖もこれまでに度々お時に強請ゆすられているんですから、身の皮を剥いでも工面くめんは付かず、二人ともに弱り抜いているうちに、なんにも知らない辰伊勢のおふくろが無暗に引き合いを怖がつて、一日も早くお時に暇を出そうとする。お時は情夫の寅松を加勢に頼んで、自分たちの云い条を素直に肯きいてくれなければ、おきん殺しの一条を恐れな

がらと訴え出ると、蔭へまわつて永太郎と誰袖とを脅迫している。もうどうにもこうにもしようがなくなつて、誰袖は永太郎と一緒に死のうと覚悟を決めた。それをお時が薄々感付いたので、二人を心中させては玉無しになるから、その前に寅松に意地をつけて、いよいよ辰伊勢の帳場へ坐り込ませようというところを、わたくしにみんな引き揚げられてしまつたんです。誰袖は所詮助からない命ですから、いつそ心中した方がましだったかも知れませんが、永太郎はまさかに死罪にもなりますまいから、もう一と足のところで可哀そ

うなことをしました」

これで辰伊勢の寮の秘密もすっかり判ったが、まだ一つの疑いがわたしの胸に残っていた。

「すると、その徳寿とかいう按摩はなんにも知らなかったんですね」

「徳寿という奴は正直者で、誰袖の文使いをしたほかには、全くなんにも知らなかったようです」

「その徳寿が辰伊勢の寮へ行くことを、なぜそんなにいやがったんでしょう。誰袖のそばには何か坐っているなんて、めくらの癖にどうして感付いたんでしょう

う」

「さあ、それは判りませぬね。そういうむずかしい理窟はあなた方のほうがよくご存じでしょう。辰伊勢の寮の床下にはおきんの死骸が埋まっていたんです」

半七老人はその以上に註釈を加えてくれなかつた。わたしが、この物語を「春の雪解」と題したのは単に半七老人の口真似をしただけのことと、事實はかの直侍と三千歳との単純な情話よりも、もつと深い恐ろしいもののように思われてならない。





半七捕物帳 09 春の雪解ゆきとけ  
岡本綺堂 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（一）」光文社文庫、光文社  
1985（昭和60）年11月20日初版1刷発行

入力：tat\_suki

校正：おのしげひこ

1999年6月27日公開

2004年2月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.2(合成) + egword universal 2.0.2

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ